

# JASIS

## NEWS

### No. 67

2021/2/5

## 日本インテリア学会会報

### ■会長挨拶

#### コロナ禍のもとでの本学会の運営について

学会長 直井英雄（東京理科大学名誉教授）

昨年（令和2年、2020年）初頭、中国に端を発した新型コロナウイルス感染症は瞬く間に世界中に蔓延し、今に至るも留まる気配を見せません。このため本学会も、皆様ご承知のように、まことに不本意な運営を強いられています。今回の会長挨拶では、会報に記録を留める意味も込めて、本年度のこの特殊な運営について、その概略を説明しておきたいと思います。会長の個人的なメモとして、お読みいただければ幸いです。

このコロナの事態に対して、会長としてまず考えたことは、あたりまえのことですが、現実的に許される範囲で、可能な限り本来の学会活動を着実に続けていくということでした。副会長や理事、総務担当の方々とも相談し、協力を仰ぎながら、そのための最善策と思われる対応を模索し、実施してきたつもりです。もちろん、後になって考えれば、ああすればよかったのではないかなということもあるのかもしれませんが、最終的には会長の責任ということで、ご理解いただければと思います。

さて、本年度（令和2年度）の運営の最初の難題は、役員選挙でした。本年度は、たまたま3年に一度の役員改選の年に当たっていたのです。実際、例年通りのスケジュールで、評議員選挙までは終わっていました。

しかし、このコロナの状況下、そこから先の理事や会長・副会長などの役員改選が、例年のようにスムーズにいくとはとても思えませんでした。無理して強行した場合には、むしろ混乱を生じたり、新年度に食い込んで大幅な運営の空白が生じたりといった事態も予想されまし

た。議論を重ねた結果、途中まで進んでいた評議員選挙の結果をそのままの段階で凍結して翌年度にその続きを行うこととし、本年度は、昨年度までの役員体制で乗り切るのが現実的なのではないかとの結論になりました。いわば緊急避難的な措置ですが、そのほうがこの難局をスムーズに乗り切れるのではないかと考えたわけです。こんな措置をとるのは、本学会創設以来はじめてのことです。会則の主旨に合致していることだけは確認しましたが、苦渋の決断でした。

具体的にどうしたかといいますと、昨年度（令和元年度）の役員は、昨年度で任期の3年目が終わることになっていたわけですが、今回に限り、その役員体制のまま4年目の本年度（令和2年度）の運営に当たることとし、そのかわり、来年度（令和3年度）の新役員の任期を2年にすることとしたのです。この方針は、理事会の賛同も得られ、ようやく本年度の運営を担う体制が整うこととなりました。

なお、この時は、支部長についても昨年度のままとし、支部長交代を予定していた支部についても、名目上は交代なしとし、新支部長予定者には実質上の支部運営をしていただく、ということとしていました。ところがしばらく後で、それではやはり支部運営がやりにくいという声が上がリ、会則等を踏まえて検討した結果、前支部長の任期の残任期間という解釈で、新支部長に名目上も支部長を務めていただく、ということになりました。

さて、こうして本年度の役員体制が整ったわけですが、その最初の重要な検討課題は、総会をどうするか、総会で議決すべき事項をどうするかということでした。総会で議決すべき事項というのは、前年度の事業報告と決算、および当年度の事業計画と予算です。これが決まらなないと、新しい年度の運営を始めることができません。もちろん、通常であれば総会を開き、この4つの議

決事項を審議決定してもらうことになっているのです。

しかしながら、コロナの拡大が予想されていたこの状況下では、総会を開くことはまず無理と判断せざるを得ませんでした。そこで、変則的な措置ではありますが、総務担当が作った総会議決事項の案を、理事会でメール審議により決定してもらい、それを会員に了承してもらうという形をとることとしました。この決定内容については、郵便とホームページで皆様にお知らせしましたので、ご承知のことと思います。

次の重要課題は大会でした。本年度の関西大会が予定されていた10月まではやや間がありましたので、コロナの状況によっては、例年のやり方にちょっと手を加えればできるのではないかと意見も確かにありました。しかし、このコロナ禍、諸外国では収まる気配を見せていませんでしたし、わが国でも、確かに小康状態もありましたが、第2波、第3波が襲ってくる可能性も否定できないと予想されていました。いうまでもなく、大会は、本学会にとってもっとも重要な行事です。この大会の開催をあきらめるとするのは本当に残念なのですが、会員の安全を考えると、この時点では、やはり中止やむなしと判断せざるを得ませんでした。

ただし、大会行事として、すべてをやめてしまったわけではありません。研究発表そのものは無理だとしても、研究発表梗概集だけなら発行できるし、発行すべきではないかとの提案受け、通常はその大会の担当支部が担当するのですが、本年は特例として学会本部が担当して、例年通りの梗概集の発行にこぎつけました。また、例年、大会の場で開催している卒業作品展についても、ウェブ開催なら可能ではないかという提案があり、本学会ホームページ上で開催できることとなりました。この経緯については、皆様すでにご承知のところだろうと思います。ご担当くださった皆様のご尽力に、深く感謝する次第です。

もうひとつ、学会としての重要な役目に、論文報告集の発行があります。これについてはコロナの影響もなく、予定通り着実に進んでいるようです。ご担当の皆様、引き続きよろしくお願いいたします。

以上、まだ年度の途中ではありますが、本学会の本年度のやや特殊な運営について、その概略をご説明いたしました。不自由このうえない運営ではありましたが、そのために気づいた新たな可能性もあったように思います。来年度もコロナは収まっていないと思われそうですが、本年度の経験を生かして、よりよい運営ができればと考えております。会員の皆様の本年度のご協力に感謝するとともに、来年度もご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

## ■第32回（2020年度）大会発表梗概集の発行について

西出和彦（副会長・研究部門代表）

第32回（2020年度）大会は関西支部にご担当いただき2020年10月24～25日に武庫川女子大学を会場として行うことで準備を進めていただいていた。しかし新型コロナウイルスの影響で、東京オリンピック・パラリンピックをはじめとしてほとんどの多くの人が集まる行事が中止あるいは延期となり、同様に国内・外の諸学会についても人の集まる研究集会等は中止となりました。日本インテリア学会も会員の健康と安全に配慮し、本年度は会場での大会開催は中止することとなりました。

しかし一年に一度の会員の研究発表の機会として「大会」は欠かせないものです。そこで大会発表梗概集の原稿募集は行い、梗概集を発行し、提出した会員は大会発表したとみなすという措置をとることとしました。国内外の多くの学会でも同様な対応をとっています。

大会での論文発表は、若い研究者、特に大学院生に新たに参加いただき、また新たなインテリア学の分野を広げていくという重要な意義があります。研究者にとっては研究業績を積み重ねる一歩となります。残念ながら若手研究者のための「学生発表奨励賞」は今回見送らざるを得なくなりました。それでも51編の応募があり、この内10名（正会員5名、準会員5名）の新入会員がありました。このような状況の中でこれだけの応募があったことは嬉しい限りであり、大会の目的は十分に達成できたものと思います。

研究テーマも昨年以上に多岐にわたり、仮想のセッションができるようなプログラム構成ができました。インテリア学の分野の広がりが期待されるところです。会場で直接対面しての議論ができず、また座長による各セッションのコメントが本会報でできないことは残念です。また発表終了後の懇談する機会がなくなったことも残念です。できることであれば誌上での活発な議論をお願いし、これを論文報告集へのステップアップの足がかりにいただければと思います。

来年度以降はまた以前の形で大会が開催できることを期待しています。しかし今後の情勢によってはオンラインを含めた新たな学会大会のあり方を模索する必要もあるかもしれません。何れにしても会員の皆様のご協力をお願いしたいと思います。

## ■令和2年度委員会だより

### □総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

冬到来に合わせて新型コロナウイルスは、再度私達の生活に影響を及ぼしております。会員の皆様には普段の生活に十分ご留意いただき、この状況が無事乗り越えていきますよう心から願っております。

さて、今年度は選挙管理委員会が昨年度末から進めておりました選挙結果を受け、新しい体制で新年度の活動を進めていく予定でございました。しかし、4～6月にかけての緊急事態宣言それに続く活動自粛等の影響により、残念ながら理事会・評議員会・総会等の学会にとって重要なイベントを開催できなくなりました。このため、総務委員会ではこの緊急事態を乗り切るために、会則に則り、急遽理事の皆様へ今年度のみ昨年度の体制で進めていくことをご審議頂き、承認を頂きました。

また、学会の研究活動における重要なイベントであります大会についても、昨年度から関西支部で準備を進めて頂いておりましたが、総務委員会から理事会に開催中止案を提案させて頂き、承認を頂きました。

これらの内容については、会員の皆様には書面にてご報告をしておりますが、皆様には大変なご迷惑、ご心配をおかけしたことをお詫び申し上げます。

先に述べましたように、現在も新型コロナウイルスの影響がありますため、学会全体を通して様々な活動が停滞せざるを得ない状況であると想像されます。しかし、この難関を学会全体で乗り越えていくとともに、今後は可能な限り新しいスタイルの学会活動を模索しながら、本学会の活動の幅を広げていければと考えております。皆様からのご意見も拝聴しながら、乗り越えていきたいと考えております。

### □広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

広報委員会では、コロナ感染の影響で総会・大会が中止になったことを受け例年の事業、総会・大会記事を掲載した会報がお届けできなくなり、大変心苦しく思っております。とはいっても会報は当学会の活動を示すものでもあり、何らかのかたちで第67号を発行しなければと願っておりました。ここに第67号を発行できたことを喜んでおります。原稿の執筆をしていただいた会員の皆様には感謝申し上げます。ありがとうございました。

つきましては次号第68号では、【「新生活様式」「3

密」「ソーシャルディスタンス」に思う（案）】と題した記事の掲載を考えております。コロナ禍で今インテリアの存在が大きくクローズアップされていると感じております。1年のコロナ禍で私たちは多くのことを学びました。その学びから思うお気持ちをお聞かせ願えれば、もしかすると「新インテリア論」なるものの構築のアイデアへと、つながるのではないかと考えております。インテリア学会員のみなさんのお知恵を拝借し、感染を考慮したインテリアには何が必要かを導きだせればと思っております。できれば全会員の「思う」がいただければありがたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

12ページの掲示板をご確認ください。

### □国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

今回は特にありません。

### □論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

2020年度の日本インテリア学会論文報告集31号については、9月末の応募締め切りまでに29編の応募がありました。2018年度は19編、2019年度は24編と応募数は年々増加しています。現在、査読委員の方々に審査をお願いしている段階です。応募いただいた会員の皆様、査読にご協力いただいている査読委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。なお、アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIA Journal 2020については、昨年と同様に、現在までに募集情報が入手できていません。ついては、本年度も残念ながら募集なしとなりそうです。

新型コロナ感染症の影響で、今年は学会員が一同に会する大会が開催できなかったことは残念でした。学会に限らず、身近な宴会も含めて、およそ「〇〇会」と名の付く様々な集いの場が失われた一年でした。新型コロナが私たちにもたらした行動変容の一つは、普段当たり前に行っていた「集うこと」に如何に価値があるかということへの気付きだったと思います。学会とは、同じ方向の関心を持ち合わせた人々が集い、情報交換することにより、社会に強いメッセージを発していくという働きがあることを改めて実感させられた2020年でした。

いかなる状況にあっても、滞りなく研究を推進し、その成果を社会に公表していくことは学会の使命でもあります。コロナ禍においても、論文報告集の応募数が例年よりも増えたことは、本学会の活力を感じさせてくれる嬉しい現実だと思えます。対面でのリアルな集いができない中、論文報告集という媒体が、会員同士の繋がり、学会と社会との繋がりを持続する大きな力になっている

ことを実感いたします。AIDIAとの連携をどうしていくのかという課題はありますが、今後とも、会員の皆様と一緒に日本インテリア学会の発信力を高めていけたら幸いです。つきましては、論文審査委員会として、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

## □表彰委員会

委員長 高月純子（女子美術大学）

本年度は何よりも安全確保のため、学会の大会開催を見合わせる事となり、研究発表が優秀な学生を表彰する「学生発表奨励賞」の授与は見合わせる事となりました。学会の中止に伴い、卒業作品展のパネル展示も中止となり各賞の授与もありませんでした。

ただ、第27回卒業作品展については、初めての試みとしてWEB上での作品公開で、インテリア学会ホームページにて、10月26日（月）～12月26日（土）に開催を行いました。初参加の学校も含め、下記の合計42校の教育機関に出展していただきました。

◇大学院（1校）：東京藝術大学。

◇大学（30校）：愛知淑徳大学、大阪産業大学、岡山県立大学、京都芸術大学、京都女子大学、共立女子大学、神戸松蔭女子学院大学、駒沢女子大学、芝浦工業大学（デザイン工学、建設工学）、昭和女子大学、女子美術大学、拓殖大学、多摩美術大学、帝塚山大学、東京造形大学、東京電機大学、東京理科大学、名古屋芸術大学、名古屋工業大学、日本大学（芸術、工学）、日本文理大学、広島女学院大学、広島大学、福井工業大学、文化学園大学、宮城大学、武庫川女子大学、武蔵野大学。

◇短期大学（3校）：岩手県立 大学盛岡短期大学部、島根職業能力開発短期大学校、日本大学短期大学部。

◇専門学校（6校）：学校法人環境造形学園専門学校ICS カレッジオブアーツ、専門学校札幌デザイナー学院、中央工学校、東京工学院専門学校、フェリカ建築&デザイン専門学校、北海道芸術デザイン専門学校。

◇高等学校（2校）：熊本県立 八代工業高等学校、千葉県立 市川工業高等学校。（\*学校名はアイウエオ順）

卒業作品展の昨年と異なる点は、いくつかありますが、一つは企画展示の担当を教育部会から、今年より表彰委員会で行う運びとなったことでした。また、今回はWEB展示なので、作品の規定を変え、提出枚数の上限を増やし、大きさをタテヨコの数値でなくデータ容量での指定としました。これによって、様々な形と大きさ、絵本のような形式も提出が可能となり、出展者の自由度を少しですが、増やせたのは良かった点でした。他に、作

品の検索のインデックスを、学校名の一覧と、担当教員の解説と作品の小さな画像（サムネイル）の他に、作品の主な表現の手段（手描き、図面、模型、実物制作）、インテリアの規模（都市、街、建築、室内、家具、プロダクト）、取り組んだテーマの分類など、検索項目を増やしました。

WEB上での作品公開を終えて振り返ると、メリットとしては、郵送料や宅配費用の支出がほぼなかったこと。そして出展者を含め多くの人に作品閲覧の機会を提供できたことです。デメリットとしては、やはりWEB掲載するための設計はウェブデザイナーではないので、担当者に労力・負担が大きくなってしまったことと、画像の容量と画質確保の調整、掲載内容の誤記のチェックと修正に最後まで時間がかかったことなどでした。

今年の展覧会について出展者や閲覧者の方からいただいた声をご紹介します。概ね肯定的なご意見を頂きましたが甘んじずに経験と工夫を今後に活かしたいと思います。

- ・大変な状況の中でご準備して下さった皆様に、大変感謝いたします。この度は誠にありがとうございます。（渡邊歩さん 東京藝術大学大学院卒業生）
- ・WEB展示のご案内、広く一般に公開できてとても良いと思っております。本学の大学HPからも案内させていただきたいと思います。（津田勢太先生 岡山県立大学）
- ・いろいろ工夫されていて、充実した内容に驚きました。コロナに関わらず、会場に行けない人にとって、非常に有益な試みだと思います。（河村容治先生 元東京都市大学・元教育部会長）
- ・WEB展示のURLを早速学科トピックスサイトに掲示し、添付ファイルを建築学科全学年全学生に通知いたしました。多くの皆様にご覧いただけますことを祈念いたします。（近藤正一先生 日本文理大学）

若い人のエネルギーと提案力には目を見張るものがあります。それを開花させるインテリア教育がそれぞれの教育機関にあります。流行や見栄えだけに流されずそれらを受けとめて伝えてゆくことは、学会の担うべきミッションの一つだと思います。次年度の作品展はどのような形になるかわかりませんが、変化を恐れず、よりよい方法を探し、協力を賜りながら継続できればと思います。

## □アーカイブ化委員会

委員長 小宮容一（元 芦屋大学）

今年度の活動は、昨年度より継続しておりました、本学会の「著作権規程」の策定と告知を行いました。学会の郵便にて7月頃にお手元に届いていると思いますが、ご確認頂けていない先生は、以下のサイトにてご一読をよろしくお願い申し上げます。

[http://www.jasis-kansai.jp/jasis\\_copyright2019/](http://www.jasis-kansai.jp/jasis_copyright2019/)

また、著作権規定の告知と同時進行して、J-STAGEの登録に必要である、ISSN番号（3種）（オンライン・プリント）の取得を完了いたしました。

1. 日本インテリア学会論文報告集  
（オンライン／ISSN 2435-5542）
2. 日本インテリア学会研究発表梗概集  
（プリント／ISSN 2435-5526）
3. 日本インテリア学会研究発表梗概集  
（オンライン／ISSN 2435-5534）

J-STAGEへの登録はアーカイブ作業との関係上1月末を予定しております。

最後に、当初の予定では現在第4フェーズでございますが、第2フェーズのデータ入力・確認の作業が、追加作業の発生及びコロナ禍の影響により、大幅に遅延しており論文集・梗概集のエクセルのデータベース制作は引き続き作業を継続しております。本委員会では、できる限り早い完成を目指しておりますので、ご協力頂ける先生はお申し出頂ければ幸いです。（記. 井上徹）

## ■令和2年度支部だより

### □北海道支部

#### 函館近況雑記

支部長 小澤 武（小澤建築研究室）

- ・函館山に繋がる市街を一望する丘が、ぶどう畑の美しい景色に変わりつつあります。

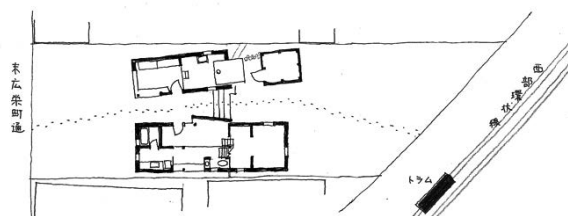
フランス・ブルゴーニュのワイナリーが'17年当地に農業法人を設立、36haのうち5haに'19年シャルドネ（白）とピノ・ノワール（赤）の栽培に着手しました。当地には'73年はこだてわいん、'76年富岡ワイナリー、'08年奥尻ワイナリーが創業、'12年農楽蔵（のらくら）の創業はグルメ通に道を開いたと言われてい

ます。道南ワインクラスターが形成されれば美食のまちに新たな魅力が加わります。

- ・東京新橋で起業、パリ遊学を経て'92年当地に設立されたペシェ・ミニョンはフランス菓子の独自の境地を切り開きました。

'19年にキルフェボン（本社・静岡市）にて修行のパティシエがフルーツタルトの店「レモンの花」を創業、今年はベルギー出身のショコラティエが当地にガトーショコラを中心に据えた「プティ・ベルジュ」を開きました。

スイーツでも函館は熱いのです。



- ・伝統的建造物群保存地区に繋がる函館市道とトラムの走る大通りに挟まれた宝来町の一角に、薪窯のパン工房が6月に完成。

試し焼きを経て現在窯の修正中です。

構想を練り始めた'17年から、敷地を貫通する通路をなんとか造れないかとデッサンを繰り返し、クライアントを巻き込んで、屋根付き小路のある小さなまちになりました。

カンパーニュを中心にハード系の天然酵母パン、春には売り出せそうです。

### □東北支部

支部長 松村光太郎（岩手県立大学盛岡短期大学部）

東北支部では、2020年2月11日に実施された総会にて、支部長が今年度から長年お努めになった早野由美恵先生よりバトンタッチし、小生が仰せつかりました。その後のメール審議でも異論がなかったため、就任させて頂くことになりました。現在、東北支部では、今年度における会員の増減がなく、16名の正会員の皆様が所属して頂いております。少人数で難しいところもありますが、今までの東北支部の活動を継続しつつ、新しいことにもチャレンジしていきたいと考えております。

さて、東北地方では、各県による差はありましたが、4月の時点でCOVID-19の発症者が少なかったものの、小中学校、高等学校における授業の開始が5月にずれ込み、夏休みが無くなりました。また、各大学においても、開始時期は様々でしたが、4月中旬あるいは5月初旬から、遠隔授業でスタートするところが多かったようです。東北地方の中でも岩手県は、COVID-19の発症者が最

も遅かったこともあり、座学の遠隔授業に併せて、実習・演習系の授業は大学に来て実施する対面授業が併用されていることが多く、ハイブリッドな授業形態で開始されました。ただし、学生から、対面授業は感染が怖いと苦情も出ていましたので、対面授業は夏休みの集中講義とする教員もいました。誰もが初めてのことで、試行錯誤の状態での毎日でした。特に、インテリア演習における図面（アイソメトリック、アクソメトリック、透視図等）の練習は遠隔授業で行いましたが、学生の手元が見えないため、進行するスピードが難しいと思いました。課題の提出で学生のできを確認しても、間違い等が多く、やはり図面の指導は個人指導に限るな、と思いました。

ただし、対面授業では、最初、大学の指導で、マスクとフェイスガードとの両者の着用義務が出されていたため、フェイスガードが曇ったりと、しゃべるのも億劫な状況でした。しかしながら、対面授業が実施されていない大学もあると聞いていますので、演習や実習について、個人指導ができるため、まだ恵まれている方かも知れません。

「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」（日本聖書協会『新共同訳 新約聖書』マタイによる福音書 6章34節）

東北地方だから、楽観的に考えられる、と批判されるかも知れませんが、今、新しい生活スタイルに精一杯であれば、その日一日が終わるときには、きっと明日への道標が見えてくるはずです。そう信じています。

## □関東支部

支部長 内田和彦（㈱オカムラ）

今年度は支部としての活動が、ほとんどできておりません。コロナ禍における支部活動に関しどのようなことができるのか考え、来年度の改善につなげていきたいと思っています。

### 「コロナで思う一言」

コロナ禍においてと言っても様々なフェーズがあり、現在はまだ途中経過にあり、New Normalと言われる新しい生活が始まったとは言い難い状況にあると思います。働く環境においても、まず真っ先に透明のスクリーンを机の上に並べて飛沫感染対策が行われました。同時に座席を間引きソーシャルディスタンスを確保しました。背中合わせでレイアウトできる机は配置を変え、原則複数人での対面会議は禁止となりました。Web会議が増え、事務所のあちらこちらで声を張り上げて会議をしている人が現れ始めると、一人で籠ることができるブースを増

設して対応しています。このような状況でのインテリアに関しては、仮設的設置が増えると思います。可変性を持たせ状況に応じて向きを変えたり場所を変えたり。在宅勤務が増えたことによる家庭内の様子にも変化が生まれています。生活様式の変化はインテリアにも必ず変化を起こします。インテリア学としての考察も新たな領域の課題を生んでくれたと思います。新型コロナというウイルスに捉われず、新しい生活様式に即したインテリア研究が活発に行われることに期待しています。

## □東海支部

支部長 中井孝幸（愛知工業大学）

新型コロナウイルス禍の中、令和2年6月27日（土）に、東海支部総会が名古屋工業大学をメイン会場にし、ZOOMによるオンラインでの参加も併用した会議形式で開催されました。支部長選挙・本部総会等の報告、令和元年度の活動報告・会計報告、令和2年度の事業計画・予算、支部役員の指名が議題となり、審議し、承認されました。

令和2年3月に計画されていた支部創立30周年記念「ミャンマーインテリア研修」も急きょ中止され、例年行っていた総会後の記念講演や研究交流懇親会、秋の見学会も基本的に中止となりました。また、中部インテリアデザイン連絡会と共催のリレーセミナーなども軒並み中止となり、なかなか例年通りの活動ができていない状況です。

こうした中、オンラインによる役員会を12月に行い、近況報告とコロナ禍でもできる支部活動について意見交換する予定です。次回の支部だよりでは、活動報告ができるように、今だからできることを皆で知恵を絞って取り組んでいきたいと思っています。

緊急事態宣言が発出された際、本学は授業方法を巡っていたいへん混乱していました。建築学科の学生たちにパソコン環境に関する緊急のアンケート調査を行い、全員がフリーWi-Fiの環境にあるわけではなく、パソコンもなく、スマートフォンしか持たない学生もいたため、オンデマンドにより受講を一定期間確保した授業を行っていました。本学の前期では随時、対面授業に戻りましたが、感染者が出たため遠隔授業になりました。後期は対面授業で始まりましたが、リモートに学生も教員もだいぶ慣れてきたようです。

## □関西支部

支部長 中村孝之（生活空間研究室）

関西支部では、昨年度末に役員の任期を迎えて選挙を行い、今年度より新しい体制で支部運営を行なっており

ます。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度は大きな事業として予定していた武庫川女子大学での第32回大会が中止となりました。実施の可能性も考慮して、準備を進めていましたので残念ではありますが、改めて次年度に第33回大会を予定しておりますので、実現できることを期待して実行委員会を再開しようと考えています。

同様に新体制発足後、支部会員が交流する機会がありませんでしたが、新しい学会活動の形として支部でZOOMウェビナー契約を行い、もはや主流となりつつあるオンライン講演会を行いました。『日本のクラシックホテルと国際観光政策』と題し、長い年月を経て愛され、そして今後も継承されるべきクラシックホテルの時代的な役割や、インテリアデザインの特徴や様式について、神戸女子大学／家政学部家政学科／砂本文彦教授に講演して頂きました。クラシックホテルの素晴らしい写真と興味深いお話で、テレビ番組にもなりそうな内容を提供していただき、また、本部のサイトからも案内していただくことで遠方からの参加もあり、オンラインにふさわしい講演会となりました。

今後もオンラインを利用した活動を検討し、皆様にご案内できる計画をしたいと考えています。

新型コロナウイルスで感じることは、人間社会は、直接会って会話することが如何に大切かということです。オンラインでいつでもどこでも会えるけど、会話は、声や表情、触れ合いや会食など五感でやりとりしていると思います。ボケツッコミは一瞬遅れるICTでは出来ません。COVID-19が落ち着いた後、Society5.0の推進による新しいライフスタイルについて、人が暮らす空間を研究する立場からも、その未来を考える必要があろうかと思えます。



奈良ホテルメインダイニング  
〈砂本教授提供・講演会案内リーフレットより〉

## □北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

北陸支部では、当初8月に長岡造形大学へ視察研修旅行を計画していました。が、コロナ感染の影響から中止となりました。白鳥先生をはじめ新潟県内の方々との懇親も兼ねての企画でもあり、次年度令和3年8月に延期して実施しようと考えています。当学会員で長岡造形大学の見学に関心があるようでしたら、支部の垣根に関係なく参加を歓迎いたします。ご希望の方は下記のメールアドレスにご連絡ください。

メールアドレス bouda@linkuconnect.jp

## □中国・四国支部

支部長 谷川大輔（近畿大学）

### 1. 支部総会及び総会学術講演会

#### ●総会

■日 時：令和2年6月27日（土）14：00～15：00

■場 所：オンライン ZOOM

■出席者：出席者：14名

#### ●総会学術講演会

■題 目：オンライン授業について考える

■講 師：平田 欽也 氏（広島工業大学）

■日 時：令和2年6月27日（土）15：30～17：00

■場 所：オンライン ZOOM

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の為、集まることができなかった為、総会をオンライン（zoom）で行いました。本年度は、どの程度の活動ができるか未定でしたが、昨年度の事業の報告、会計報告、また本年度の活動計画を議論しました。このうち、毎年行っているデザインデイズは、オンラインで行う予定であることが報告されました。また本年度は、学生の活動も未確定でしたが、学生ネットワーク・マンセルから今後の活動方針の報告がありました。オンライン（zoom）による総会は、直接顔を合わせて議論ができないと言った難点もありますが、（中四国も広いため）遠方の方も参加できる点が良いという意見が多くありました。次回から総会は基本的にオンライン（zoom）で行うことで合意しました。



総会学術講演会の様子（講演者は平田欽也氏）

また総会に続いて、総会学術講演会として広島工業大学の設計製図のオンライン授業について平田欽也先生の講義を伺いました。どの大学もオンライン授業に関しては手探りの状態であり、特に製図系の授業のオンライン化については試行錯誤の状況であったため、質疑も多いに盛り上りました。広島工業大学は、エスキスシートの活用などきめ細かい対応により、オンラインの特徴を活かして、対面授業以上の効果を出そうと取り組まれていることが分かり、大変刺激になりました。

## 2. 広島デザインデイズ2020参加

■主 催：日本商環境デザイン協会中国支部

共 催：広島県、日本サインデザイン協会中国地区、  
日本インテリア学会中国・四国支部

協 力：大光電機㈱

■会 期：令和2年11月21日（土）、22日（日）

■会 場：イノベーション・ハブ・ひろしまCamps

■内 容：Camps学生デザインコンペ、デザインリーグ  
学生コンペ、深田勝哉氏デザインセミナー、  
KUKAN DESIGN AWARD2020他パネル展示

「広島デザインデイズ」は、中国地方のインテリア関連の団体、企業、大学等が、デザインを「見る、学ぶ、体験する」ことを身近に感じるイベントとして毎年開催しています。今回も、本学会中国・四国支部学生組織（名称：マンセル）の学生が準備・運営に参画しました。

Camps学生デザインコンペは、広島県の依頼をもとにチャレンジ、つながり、イノベーションをキーワードにして当会場の将来的な魅力を高めるコンペです。近畿大学工学部、広島工業大学、広島女学院大学、穴吹デザイン専門学校学生の混成4チームが、装置や空間の視点から広島県、団体会員へ向けてプレゼンをしました。審査



学生コンペ プレゼン風景



「皆さん、お疲れさまでした」

員からは提案を基に将来的な活用を検討したいというコメントがありました。

コロナ禍で様々な知恵を出し合い、会場とオンラインを併用した開催となりました。成果と改善点が見え、今後へ向けての可能性は広がりました。（文・松尾兆郎）

## 〇九州支部

支部長 近藤正一（日本文理大学）

本年度より九州支部長を拝命しました近藤です。どうぞよろしくお願い申し上げます。とても少ない会員数の小さな支部ですが、むしろそれを長所であると考えて、今後は、この場をお借りして会員の活動をご紹介していくことで、毎号、会員ひとりひとりの輝きが見えてくるような支部だよりを目指していきたいと思います。

第一弾は、九州産業大学 建築都市工学部 住居・インテリア学科 諫見泰彦先生の活動です（以下ご本人による文章）。

1) ハウスメイト×九州産業大学 産学連携「Re:部屋プロジェクト」(写真1)

株式会社ハウスメイトマネジメントと産学連携した「Re:部屋プロジェクト」は、リフォームの企画・設計・見積・施工管理・リーシングまでの実務に携わる学生主体の研究活動で5年間継続しています。本年度は住居・インテリア学科4年生・安達璃保さん設計の「見せない収納で魅せる部屋」と同・執行裕太さん設計の「和風モダンスタイル」が選ばれて実現しました。また福岡県教育文化奨学財団の助成を得てプロセスの情報発信に努め、コロナ禍を逆手にとって施工中の現場からオンラインレクチャーも実施しました。



写真1 Re:部屋プロジェクト（撮影：諫見泰彦）

## 2) 文化庁子ども育成総合事業「積み木であかりのワークショップ」(写真2)

文化庁文化・芸術による子ども育成総合事業として、山口県の長門おもちゃ美術館で、積み木とLEDを使い「あかりの良否は光源・反射・遮蔽のバランス」との知見を子どもたちが学ぶワークショップを実践しました。LEDを中心に様々な形の積み木を並べたり重ねたりして、積み木を照らす光や積み木と積み木の間から漏れる光を鑑賞しました。2年目の本年度は童話作家・きみきみよ氏が書いた教材童話「あかりのありか」を子どもたちが読み、読書感想光として作品を制作し、その写真を使ってカレンダーも作りました。



写真2 積み木であかりのワークショップ (撮影：諫見泰彦)

さて、コロナ禍であっても、できる範囲で各種プロジェクト活動や見学会に取り組んでいます。学会主催というわけではないですが、12月4日に国東時間株式会社の松岡勇樹氏の企画による見学会を開催しました(写真3)。バスを2台用意して分乗し、マスク着用はもちろんのこと、見学先の窓を全開にするなどの配慮をしたうえで、本社工場とアトリエを見学させていただきました。参加した学生たちの日ごろは見せないような真剣な眼差しが印象的でした。机上の講義では身につけること



写真3 国東時間株式会社見学会 (撮影：村田岳彦)

ができない、ものづくりのスピリットに触れることができました。なお、成果物は作品の実物と説明動画のセットで提出しウェブ上で共有されます。従来の取り組みと新しい取り組みの融合の中に、今までになかった価値が芽生えることを期待しています。

そして最後に、今年度のメインイベントである支部長賞授与事業のご紹介です。昨年度、前支部長の森永智年先生が「日本インテリア学会九州支部規約」を改訂してください、「支部長は支部正会員の推薦を受けて、特にインテリアに関する成績・活動等が優秀と認められる者を表彰することができる」こととなりました。さっそう、今年度から新規事業として開始する予定です。こうした取り組みが九州のインテリア界に徐々に浸透していく過程の中で、これまで知られることなく埋もれていた価値ある活動を明らかにすることができ、インテリアを志す学生を中心とする若い皆さんの励みになりましたら素晴らしいと思います。今後の九州支部の活動に是非ご期待ください。

## ■ 令和2年度研究部会だより

### □ 歴史研究部会

部会長 河田克博

例年、見学会を、大会に合わせて実施しているのですが、今回はコロナ禍で大会が中止となったため開催できませんでした。コロナ禍は、様々な所で以前の業務形態の変化を余儀なくしています。

私事、定年退職した後、以前の勤務先で1年生後期の製図の非常勤講師をほぼ隔週で勤めているのですが、今年はコロナ禍のため、100%の対面授業が出来なくなりました。オンラインを混ぜた授業です。各課題の説明をビデオで録画し、それをwebに流し、学生はムードルで見るという形態です。本来ならば、大学に備えてある平行定規を使って作業する実習授業ですが、大学で授業できないので、学生にA2判対応の平行定規を購入してもらいました。「これは建築士試験のときも使えるから……」という理由を添えて。中間チェックは自身で撮影したものをネットで送りコメントを送り返し、出来上がった作品は、短時間ですので近くの学生は直接提出させ、遠方の学生には郵送してもらうという形にしました。そのため、以前はA2判を含めた課題でしたが、全課題をA3判の提出に変えました。コロナ禍がやや収まった頃より、中間チェックを、学生を学籍番号の奇数と偶数に分け、密を避けた対面授業に移行しました。対面授業で初めて学

生の作業形態を観察した時、課題説明の録画で丁寧に製図器具の使い方を示したはずにもかかわらず、約3分の2の学生がでたらめな製図器具の使い方をしていたのにはびっくりしました。やはりweb授業は実習には不向きだということが、ある程度想像はしていたのですが改めてわかりました。インテリアの授業も実習による授業が多いと思いますが、他の学校関係の皆様はどう対応しておられるのでしょうか。学年が上に進めばパソコンを使った授業も出来るでしょうが、それでも教育の質は薄くなるでしょう。昔「製図や設計製図は通信教育ではできない。学校に来て周りの人の刺激を受けながら学んでいくものだから……」ということを知っていたのが脳裏に焼き付いています。コロナ禍が終息し、以前の教育形態に早く戻れることを願うばかりです。

## □人間工学研究部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

今回はありません。

## □教育研究部会

部会長 金子裕行（千葉県立市川工業高等学校）

新型コロナウイルス禍の中、今後のインテリア教育をどのように考えて行けば良いのか。色々と議論する時間が必要であるとはわかっていますが、今年度は一度も部会を開催出来ておりません。

新型コロナウイルスの影響で高等学校においてもICT教育の波が急激に押し寄せてきていることを感じます。

大学のようなオンラインによる遠隔授業、googleクラスルームの活用、chromebookの試験的活用、zoomを活用した学科説明会等、今まで経験しなかったものを必要に迫られ使うことが多くなりました。

私はデジタルよりもアナログの方が性に合った人間です。急激な変化に対応できず戸惑う場面も増えましたが周りの若い先生達の支援により何とか対応しています。

近頃、AI等の発達やオールデジタル化時代の到来により、社会全体が「高速化」と「利便性の追求」へと動いています。一方で京都大学情報学研究科の川上浩司先生が提唱する「不便なこと」（時間がかかる、手間が多い）から生み出される何かに、積極的な価値を見いだそうとする「不便益」という考え方が注目され始め、各方面から注目を集めています。教育の中にも便利さを追求した波が押し寄せる中、この「不便益」についても見直す必要があるのではないかと考える昨今です。

## □期限付き研究部会

部会長 西出和彦（元東京大学）

「意匠制度改正に基づく建築・インテリアデザインの保護に関する研究」

小玉一徳（三重大学）

期限付き研究部会の制度を活用させていただき、新規の研究を開始しましたので、ここに紹介いたします。研究の背景は、令和元年5月に特許法等の一部を改正する法律が公布され、意匠制度の保護範囲が、従来の「物品」から、建築やインテリアなどの「空間」まで拡大されたことにあります。本改正は、特許等の知的財産あるいは主に店舗等での空間デザイン業界の一部では、いわゆる大改正として受け止められています。本研究では、特許庁のねらいや企業等の活用状況等に関して調査を行い、本制度の有用な利活用方法を考察することを予定します。

研究代表者は、2018年より三重大学地域イノベーション推進機構に所属しており、大学を中心に据えた多様な社会連携を果たすセクションにいます。そこで、知的財産に関する仕事にも関わるようになり、これまでのインテリア関連と現在取り組んでいる知財関連の両者の重なる領域として、本研究を小さく立ち上げてみたという次第です。現在のところ進展は少なく、また、予定していたヒアリング調査は新型コロナウイルスの流行の影響により中止となり、他の手法等を模索しています。

他方で、先日、内装の意匠として、カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)が出願していた蔦屋書店の内装が第1号として意匠登録されたことが話題となりました。また、特許庁からは、内装の意匠出願件数は132件（10月1日付）と公表されました。これらのことから、業界においても一定程度浸透しつつある様子が推測でき、今後まずはこれらの動向をウォッチしつつ、研究を進めて参ります。ご意見・コメント等ございましたら、ご連絡いただけますと幸いです。

「甲子園ホテル・帝国ホテル比較研究」

黒田智子（武庫川女子大学）

記述が少ない甲子園ホテル（1930）の設計意図を、帝国ホテル（1923）と比較することによって明らかにしたい。そのために、帝国ホテルおよび甲子園ホテルの常務取締役兼支配人・林愛作と甲子園ホテルの設計者・遠藤新のそれぞれの経験を、その背景と共に考察することによって、新しい知見を得た。

フランク・ロイド・ライトの帝国ホテルは、下田菊太郎の設計案（1911）が下敷きになったとされるため、ま

ず、下田の自伝から行動を時系列に整理した。日本の伝統的建築様式や作庭を取り入れた下田案だけでなく、それを凌駕したライト案を吟味し評価する立場にあった林の判断は、1900年から1908年まで勤務した美術商・山中商会ニューヨーク支店での経験を基盤にすると考えられる。

そこで、当時の資料をもとに商会の活動を整理した。林は、美術品売買以外にオリジナル家具を製造し、室内装飾から造園施工までも行う業態の中で経験を積み、さらにフェノロサとの協力関係により、日本美術の様式研究の最先端に触れたと考えられる。特に、商会は、1904年のセントルイス博において、折衷的室内装飾による「日光式展示室」を出展し、博覧会後には、松楓殿（高峰譲吉の迎賓館）建設に室内装飾で参加している。それを通じて林は、日本美術を活かした国際親善のための空間設計にも触れたと考えられる。

一方、遠藤は、ライトのチーフアシスタントを務める以前、東京帝国大学の卒業設計（1914）において、すでに帝国ホテルの仮想設計プロジェクトに取り組んでいた。この時期、林はライトに接触していたと考えられ、同年の卒業論文は、帝国ホテル側にとっての新館建設の調査の一環にも位置付けられ得る。最新ホテルの情報を林から得て、外賓を迎えるホテルの持つべき条件を整理したことが読み取れる。

それらを総合し具体化するための理念・方法は、歴史主義による建築形態の壮麗・豪奢ではなく、西洋の生活様式に即すると同時に日本文化に接する生活の実現を起点としている。その基盤には、大学入学以前、仙台第二高等学校時代の恩師・土井晩翠を通じて得たトマス・カーライルの『衣裳哲学』（1838）の影響が考えられる。カーライルは、「衣服」を文明社会における人間のあらゆる営みのモデルとし、「衣服」の本質を究明した。その「衣服」を「建築」に置き換えて遠藤の卒業論文を分析すると、カーライルと土井の思想・理念を受け継ぐだけでなく、甲子園ホテルの設計意図について遠藤が遺した短い記述との共通性が確かも認された。

上記のような文献研究には資料の閲覧が欠かせないが、三密回避から平時のように身軽にはおこなえない。一方、学生との遠隔でのやり取りは、文献研究に求められる思考やその記述スタイルと対極にあると感じることが多い。コミュニケーションや評価のツールが、授業内容自体を規定するのであれば、そこに意識を向けるべき責任を感じる。また、実習系の授業では、対面における情報量がいかに多いかを再認識しつつ、遠隔がもたらす学生との「一対一」のコミュニケーションにはメリットも感じている。

## ■事務局より

事務局長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

事務局を引き継いで2年目に入ろうとした年にコロナ感染が広がり、右往左往する1年であったように思います。

本年もよろしくお願いいたします。

お願いとご報告があります。

北陸支部の金沢に事務局を移して以降、事務局の業務をお手伝いしていただいております伊藤千佳さんが出産のため2月～10月までお手伝いできないことになりました。体調等の状況によっては年内お手伝いできないことになるかもしれません。その間私棒田が行うことになりました。私自身学生と起業した会社運営や授業、広報委員会・北陸支部と二足、三足のわらじとなりました。がんばって伊藤さんをお願いしていた業務をこなしていく所存ですが、迅速とはいかないこともあるかと存じます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

## ■ 掲示板 広報委員会から原稿募集のお願い

### コロナ禍での「新生活様式」「3密」「ソーシャルディスタンス」に思う

私たち日本インテリア学会会員は、これまで「人と人」、「人とモノ」、「人と空間」などについて考え、論じてきましたが新たに目に見えない「新型コロナウイルス」の蔓延の中で「新生活様式」、「3密」、「ソーシャルディスタンス」などを前提に考え、論じていかなければならなくなりました。国内において新型コロナウイルスの感染者が発生して1年が経過し、新型コロナウイルスが生活に及ぼす影響や感染予防に向けた生活の仕方など、分からなかったことが少しずつ分かってきたように感じております。

そこで、今後の研究課題ともなり得るコロナ禍におけるインテリアはどうあるべきかなどについて学会員の皆様のお考えを「思い」と題して特集記事を会報に取り上げたく、下記の通り原稿を募集いたします。

忌憚のないお考えをお寄せいただき、会員の皆様と共有することにより新たなインテリア論へと結びつけることができるものと考えております。投稿原稿が多くても2

回、3回に分けて必ず掲載をさせていただきます。

どうかご投稿をいただけますよう宜しくお願い申し上げます。

#### 記

1. 投稿条件：正会員、準会員、賛助会員
2. 締切日：第1回募集として4月26日（月）[会報第68号に掲載予定]  
第2回募集[9月10日（金）]  
(多くの思いが新インテリア論の礎になると思っております。何気なく思いついたものがきっかけとなり新たな研究に展開する可能性もありますので、第1回に間に合わなかった方はどうぞご投稿よろしくお願いいたします。)
3. 提出先：日本インテリア学会 広報委員会  
住所：920-0941石川県金沢市旭町1-25-24  
電話：080-2386-5652(電話連絡は金曜日13時～16時でお願いします。)  
メール：jasiskoho920@gmail.comまたは k-bouda@kanazawa-gu.ac.jp
4. 執筆原稿の文字数：1,150文字以内でお願いします。  
文字数とは別に「タイトル」と「名前」と「所属」の記載をお願いします。

## ■ 編集後記

広報委員 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

令和2年の年が明けた1月、2月はいつもどおりの日常でコロナというウィルスへの恐怖は感じなかったのですが、3月に入って状況が急速に変わっていき、総務委員会が千葉工業大学でありました折にはマスクをして、手術用の手袋をはめて出席したことを思い出します。あれからもう1年になろうとしています。「今年はどうなるのだろうか？」と思うお正月を過ごしました。

年越しの発行となりましたが、何とか本年度に1冊の会報が発行できて大変うれしく思っております。

会員の皆様におかれましてはコロナにご注意をはらいながらよい1年であることを願っております。どうかお身体ご自愛ください。

次号第68号は次年度の事業伝達記事の掲載を主に考えておりますが、現在の状況からみて掲載できるかどうか

不透明であります。次号の発行は4月下旬から5月上旬を考えております。広報の方でもお願いしました「思い」原稿も掲載したいと考えておりますので、遅くとも4月上旬までには原稿お願いいたします。字数は1,150文字以内でお願いします。

#### ■ 日本インテリア学会会報第67号（2021.2.5発行）

編集者：棒田邦夫

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：棒田邦夫（委員長）

小俣祐樹、角田静香、清水隆宏、

西岡基夫、松尾兆郎

e-mail：k-bouda@kanazawa-gu.ac.jp（棒田邦夫）

#### ■ 事務局

日本インテリア学会 事務局 伊藤千佳、棒田邦夫

〒920-0941 石川県金沢市旭町1-25-24

電話：080-2386-5652 FAX：076-262-6530

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp